



いと
愛しい女・上

ピート・ハミル

高見 浩=訳

Pete Hamill

Loving
Women

いと
愛しい

ピートソハミル

高見 浩＝訳



河出書房新社

Pete Hamill ;
LOVING WOMEN—A Novel of the Fifties
© 1989 by Pete Hamill
The Japanese translation rights arranged with Pete Hamill
c/o International Creative Management, New York through
Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

いと
愛しい女（上）

©1991 Printed in Japan

1991年 4 月22日 初版印刷

1991年 4 月30日 初版発行

著 者 ピート・ハミル

訳 者 高見 浩

装幀者 渋谷育由

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2

電話 (03)3404-8611〔編集〕 (03)3404-1201〔営業〕

振替 東京 0-10802

印刷 中央精版印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-309-20159-8

○目次○(上)

第1部	
一九八七年	13
第1章	21
第2章	32
第3章	44
第4章	52
第5章	61
第6章	65
第7章	77
第8章	82
第9章	92

第24章	第23章	第22章	第21章	第20章	第2部	第19章	第18章	第17章	第16章	第15章	第14章	第13章	第12章	第11章	第10章
215	200	192	187	171		168	158	146	141	137	131	121	109	102	95

(以下は下巻)

第34章	338
第33章	327
第32章	319
第31章	299
第30章	289
第29章	275
第28章	270
第27章	258
第26章	237
第25章	226

愛^{いと}
しい女
(上)

サル・コステラ
ニック・オクラン

そして

ミルトン・キャニフ

の思い出に捧ぐ

消えた船乗り仲間、男たちの常で、永遠に失われたのだ。彼らの誰ひとりとして、私はその後、二度と会ったことがない。だが、ときとして、春の雪解け水に乗った記憶が、「九曲がりの川」を力強くさかのぼってくることもある。すると、空漠たる水流を一隻の船が漂ってくる——「黄泉の国」の乗組員の操るかぐろき船が。彼らはかぼそい声で叫びつつ、目の前を行き過ぎながら合図する。われわれは共に不滅の海を航海して、われらが罪深き生から、一つの意味を汲みとらなかつただろうか？　さらば、兄弟たちよ！　きみたちは良き仲間だった……

——ジョーゼフ・コンラッド、『ナーシサス号の黒人』

おれは漂ってる、漂ってる、大海原の船のように
おれは漂ってる、漂ってる、大海原の船のように
この世にはだれ一人、おれを好いてくれるやつはいない

——チャールズ・ブラウン、「ドリフティン・ブルース」

ああ、もう一度試みよう、そうすればうまくゆく！

——ヘンリー・ジェイムズ

私は一九五三年から一九五四年にかけて、エリスン飛行場に配属されていたことがある。だが、この本は純然たるフィクションである。登場する人物や出来事は、すべて私の想像の産物にすぎない。

第1部

錨を上げよ、若者たち、錨を上げよ

一九八七年

私はいま、安モーターのベッドに横たわって、メキシコ湾の波音に耳を傾けている。商売道具のカメラは銀色のハリバートン・ケースにしまったままだ。シャツとジーンズはクローゼットにかけてある。壁には、ペンサコーラ上空を密集隊形で飛ぶブルー・エンジェルズの色褪せた写真が貼ってある。ここではルーム・サーヴィスは頼めない。さっきから空腹を覚えていたのだが、動く気にもなれない。三日目の妻と別れてから一週間。故郷から千五百三十六マイル離れたところに、いま、私はいる。

荷物をまとめて、ほぼ三十年ぶりにこの地にやってくるのは、苦痛でもなんでもなかった。すでに、いろいろなことに倦んでいたからだ。そう、ニューヨークと、そこにいる知人たちに。写真に。自分自身に。折りからニューヨークには疫病が蔓延していた。周囲の至るところで人々が死んでいた。恐ろしい猛烈なヴィールスが彼らの血中に広がって、彼らをつかのま人間に仕立てあげていたすべての免疫システムを破壊してしまったのである。新聞にはたいいてい前日の犠牲者の名前がのっていた。そこには知

人の名前もいくつかまじっていた。すると頭の中は彼らの名前でいっぱいになり、私は生前の彼らを思いだして、苦痛に満ちた最後の日々様子を思い描こうとしてみる。が、ほんの二、三時間もすると彼らの顔はぼやけてきてしまうのだ。

別離に先立つ数週間、妻のローズと訪れたあちこちのレストランで、周囲の空気を汚染している名前をほかにもいろいろと耳にした。バーニー・ゲッツ。ドナ・ライス。アイヴァン・ボスキー。フォー・ホール。オリヴァー・ノース。その他、何百という人々。その年、ニューヨークでは彼らの名前が食事とともに咀嚼され、その汚らしいエピソードがもろもろの噂話とともに消化されたのである。周囲を見まわすと、ビジネス・スーツをきちんと着込んだ若者たちが目に入る。彼らの口にはぼるのはジャンク・ボンドであり、サヤ取り売買であり、レヴァレッジド・バイアウトだ。それに、こすからいパトナーに裏切られたとかどうしたとか。五十一歳の私は急に老け込んだ気分になる。で、やたらとタバコをふかし、たいいていの晩レストランで、引き締まった体軀の、フィットネス・クラブで肌をこんがりと焼いた若者たちに怒鳴られた。彼らの連れの女たちは、そのわきで、いかにも迷惑そうに煙を払いのけていた。喫煙の習慣は、私が彼らとは別世代に属することを示している。たしかに、私の踏襲している生活の流儀や姿勢は——仕事のスタイルは別にして——ボガートやあの行動派の放送ジャーナリストのマロウ、カミュやマルローによって形造られたものだ。彼ら、かつての生ける偶像たちは、男らしさのシンボルとしてタバコを口にくわえ、何百万本分の煙を吸い込んだあぐく死んでいった。私の場合、なお悪いことに、飽食の罪を何時間もノータラス・マシーンで運動することで償わなければならない。この時代に、理想的な体重を二十ポンドもオーヴァーしている。いまはまだ老け込んではいないが、といつてももう若くもない。私の誕生日の夜、妻のローズはこちらに身を寄せると、あの灰色の目を光らせて不躰に訊いてきたものだ。「ねえ、いまのあなたの望みはなんなのよ、マイケル?」